

Ⅲ 研究部のあゆみ

1 研究主題

主体的に運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方
～山間部小規模校の実態に即した活動の創造と展開～

2 主題設定の理由

(1) 西臼杵郡における学校規模の実態

へき地校 7 校、平地校 6 校→高千穂小学校以外は単式学級や複式学級である。

長所：運動量の確保がしやすく、個別指導が行いやすい。

学校独自の体力向上に向けた取組が行いやすい。

共通理解・共通指導がしやすく、研究内容が浸透しやすい。

県内他地域の小体連の取り組みについて情報交換ができる。

小中学校が連携し、児童・生徒の体力を経年変化を追って把握することができる。

短所：校務分掌の入れ替わりが多く、研究の継続が困難である。

少人数のため集団競技が行いにくく、児童の体力差も大きい。

運動場、プール施設など、整った環境で行うことが困難である。

(2) 子ども達の実態

- ・徒歩通学を推奨してる学校が多く、足腰が丈夫な児童が多い。
- ・スポーツ少年団の種類は豊富だが、体力の二極化が見られる。
- ・「体育のやくそく」が浸透し、規律のとれた集団行動がとれる。

3 研究の目標

- 小規模校の実態に即した体育科学習や校内活動、授業展開や具体的指導の在り方について究明し、西臼杵郡内の小学校に波及させる。また、体育科における資質・能力を育成するための「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」を相互に関連させ、体育科に求められる学びのより一層の充実が図られるようにする。

4 研究仮説

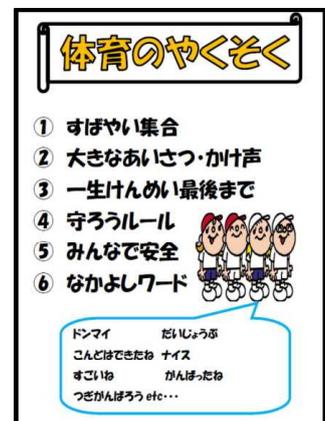
- 体育科学習において主体的な学びが図られるよう、教材・場・課題の持たせ方を工夫し、小規模の特性を生かした対話的な学びを活動に位置づけることで、体育科に求められる学びの充実につながるであろう。

5 研究の実際

(1) 主体的な課題設定を行う工夫

① 「体育のやくそく」を活用した体育科学習の取組

西臼杵郡小体連では、5年ほど前から郡内各校に「体育のやくそく」を浸透させ、主体的な体育科学習の実施に努めている。体育主任が各校において伝達し、どの学級でも「体育のやくそく」を軸とした授業の展開に努めている。課題設定や話合いの場面、友達への声のかけ方など、継続した指導が行われている。体育館に掲示することによって、児童も教師も意識することにつながり、体育科における指導が、学級経営、また学校全体の雰囲気作りにまで効果的に作用していると言える。



② 道具を使った課題設定

少人数の学校では、様々な道具が十分に活用できるため、個人の課題設定に役立てることができる。持久走では、1人1人にストップウォッチを持たせて走らせることで、自分のペースを常に意識し、目標タイムを設定できるようにしている。児童は自分の体力を知り、自らの体力にあった目標値を設定できるため、練習の仕方にも大きな効果が得られる。



③ 児童同士による課題設定



子ども達は、前時に指導された技のポイントをもとに、小グループで技を見合い、気付いたことを付箋紙に記入する。書いた付箋紙をもとに小グループで話し合いながら、それぞれの本時の課題を設定する。自分では気付かなかった部分を友達からアドバイスされることによって、より具体的な課題設定を行うことができる。アドバイスすることによって、自らの振り返りにもつながるので、効果的な課題設定の仕方と言える。

(2) 協働的な課題解決を行う工夫

① ICT(タブレット)を使った指導の工夫

グループで話し合いながら設定した課題に沿って、グループごとに練習させ、お互いの技を見合いながら課題に沿ってアドバイスをさせる。友達の技を見る位置や技を見るポイントについては、グループ単位で指導を行う。また、ICT(タブレット)を活用し、7秒前の映像が自動再生するアプリを見ながら、課題に沿ったアドバイスをするように指導する。これにより、アドバイスもより具体的となり、技の改善にとっても効果があった。ICTの活用によって指導方法の幅が広がり、動画を見ながら指導することによって、児童と教師のイメージを共有化することにもつながった。



② 技のポイントを言語化した指導

ワークシートを活用して安定した開脚跳び、台上前転、抱え込み跳びに取り組みさせた。イラストに技のポイントが明記してあるので、児童は技のイメージをもつことができた。安定した開脚跳びの練習では、跳び箱の横に児童が立って、踏み切りの強さや腰の高さについてアドバイスさせるようにした。台上前転の練習では、「トン、クルン、



ピタッ」とかけ声をかけながら、友達の動きをしっかりと観察して、技の出来栄えについて伝え合う姿が見られた。技のポイントを言語化し、児童と教師の共有化を図ることにより、指導の一貫性が生まれた。児童はアドバイスでも具体的な言語としてポイントを伝え合い、協働的な解決につながった。

(3) 山間部小規模校ならではの体力向上に関わる取組

① 町内の小中学校が連携した体力向上の取組

日之影町では、全小中学校で同じ内容の運動を、朝の時間に20分間設定している。1月～2月にかけては「元気タイム」と称して、全校児童でなわとび運動を行う。町内の4小学校が、1つの中学校へ入学するため、一貫した体力向上に役立っている。



② 小規模校による全校一斉の運動遊び

小規模校の特性を生かし、委員会活動とリンクさせた「全校で遊ぶ日」の設定を行っている。異学年で交流する場となり、遊びの内容も様々な運動に触れられるよう工夫している。縦割り清掃班や地区別に分けて競い合う場面を設定するなど、グループを様々に変え、楽しみながら体力向上を図れるよう工夫している。



【固定遊具を使った清掃班対抗リレー】



【地区別によるクモ鬼ごっこ】

③ 9カ年の経過を分析できる体力カードの活用

高千穂小・押方小・岩戸小・高千穂中学校が連携して、9カ年を通して新体力テストの結果を記入できる「体力カード」を作成している。児童は、自分の体力について9カ年を通じた経過をたどることで、目標の設定や自己管理にも役立っている。小学校卒業から中学校入学の引き継ぎ資料として、6年目が経過している。今後さらに有効な活用を模索している。

④ 学校単位による地域行事への参加

山間部小規模校ならではの特性を生かし、地域行事への積極的な参加を行っている。全校で参加する場合もあり、地域と連携した体力向上に取り組んでいる。各町が主催する駅伝大会と校内の持久走大会をリンクさせ、記録向上に努めている。



6 研究のまとめ

西臼杵郡小体連では、年々小規模化していく山間部の特性を鑑み、各町内の小中学校による連携を進めている。小規模であることのデメリットに目を向けるのではなく、小規模だからこそそのメリットを、各校の連携によりさらに大きなプラスへ変えていくよう、今後も西臼杵郡小体連の研究を深めていきたい。